



成田 晶彦 (なりた あきひこ)

昭和44年東京生まれ。前職では電気通信とICTシステム開発会社を経営。40歳を超えたら島暮らしという夢の実現のため、さまざまな島の候補から関前諸島を選定。協力隊として今治市岡村島に移住し定住に向け活動中。

安井 紫乃 (やすいしの)

昭和47年、大阪生まれ大阪育ち。東京でデザイン・WEB制作の仕事を経て、人間らしい暮らしへの夢を実現するため、今治市関前諸島の地域おこし協力隊となる。現在、岡村島への永住のため活動中。



「まるせきカフェ」にて。成田(右)と、安井(左)。

定住へ向けて 島に産業をおこしたい

◆それぞれに夢を求めて出会った島

岡村島は本州、広島県呉市から、七つの橋でつながる「安芸灘とびしま海道」の終点にあたり、他県とのみ架橋されているという珍しい地域で、島の人口は平成二六年五月現在で約三八〇人、おおげしま大下島、こおげしま小大下島の三島あわせても五〇〇人程度で、高齢化率は六七パーセント、小中学生は全員で九名という高齢・過疎化の進む地域である。

平成二四年四月より関前諸島の地域おこし協力隊として移住してきた私たち成田晶彦と安井紫乃の二名は、現在任期最終年度となる三年目を迎え定住に向けた取り組みを進めている。

成田隊員は東京豊島区で育ち、移住前は電気通信工事と建設業向けICTシステムの会社を経営していた。四〇歳を過ぎたら島暮らしという夢を持っていたこともあり、会社を立ち上げたときに掲げた目標を達成できたことから、日本各地の島を訪れ移住先を探していた。最終的に候補に挙がったこと、



愛媛県今治市に属し、今治港の北西17kmの位置にあり、岡村島・小大下島・大下島の3島で構成されている。

たのは伊豆諸島・小笠原諸島・吐噶喇列島・壱岐島・沖繩島・瀬戸内海の島々。その中で自分なりにさまざまな角度から考慮した結果、瀬戸内海に絞って移住先を探すことにした。四国をめぐりながら島々を廻っていたが、たまたま新居浜にある大島の港務所でフェリー待ちをしていたときに観たテレビで、今治市の島嶼部で「地域おこし協力隊」の募集があることを知り、今治の大島・伯方島・大三島・関前諸島に足を運んだ。その中で、自分が思い描いていた理想の島にぴったりあてはまるような地域との出会いがあった。それが関前諸島だった。

安井隊員は大阪市内で育ち、移住前は東京でデザイン・WEB制作の仕事をしていた。六〇歳を超えたら、畑仕事などをして暮らしたいという夢を持っていたが、友人に地域おこし協力隊の募集があることを聞き、将来やりたいことは、いま始めたほうがよいのではないかと思いつき、今治市の島嶼部をまわり、運命の島、関前諸島とめぐり会った。島暮らしをイメージすると、コンパクトな島の大きさ、どこからでも海が感じられる要素が不可欠であり、離島感と最低限の利便性の両立、都市部にあるような店舗（コンビニなど）がないことも求められる。その条件すべてがここにはあるのだ。そして何よりも島の人々の温かさ人と人柄に惹かれた。

今治市の地域おこし協力隊は、四つの島嶼部の六地域に

二名ずつ計一二名が配置されることになっていたが、永住を前提に応募しているため、関前諸島以外であれば辞退するという覚悟で面接に臨み、幸運にも採用された。

協力隊に応募した動機は、島暮らしの夢の実現だけでなく、いままで培ってきた自分の経験を地域に活かしながら定住したいという想いがあったからだ。協力隊という形で入っていくことができれば、普通に移住するだけでは実現できないような活動、人脈づくり、そして活性化にも携われるという環境が整っている。そして、もしかしたら地域の方々全員と知り合えるのではないかという期待もあった。この素晴らしい地域を盛り上げ、将来にわたり安心して住める島にしたいという想いで活動している。

◆最初の仕事は地域の土産物開発

「地域おこし協力隊」という言葉から連想されるのは、地域の人々のお手伝いをしてくれる人というイメージではないだろうか。実際、地域活動のサポートなども行うが、私たちは三年間の任期の間に定住できる術をみだし、実際に地域に根づくことをいちばんの使命とし、地域課題の解決と定住が結びつくような活動をしていこうと決めて動きだした。地域行事への参加、各種勉強会の運営、社会福祉協議会や地域活性化推進協議会との連携など、できるだけ多くの方々と交流できる活動を心がけた。



プリンのたまごひめっこプリン。

隊員として最初に依頼されたのは、地域の土産品開発。関前諸島には、とくに目立った土産品がない状態で、柑橘なども今治全体のブランドに統合されているため、関前をPRできて子どもから大人まで楽しめるスイーツの開発を開始。試行錯誤の末にでき上がったのが「プリンのたまごひめっこプリン」と「島の恵みたっぷりパウンドケーキ」である。

「プリンのたまごひめっこプリン」は、卵の殻の中に本物の甘い焼きプリンが入ったスイーツで、関前諸島にこんなに面白いスイーツがあるというインパクトを狙ってつくり上げた商品。生卵を割るように殻を二つに割るとその中に卵ではなくプリンが入っているのが特徴だ。

「島の恵みたっぷりパウンドケーキ」は、島で採れるレモン・フェイジョアなどのフルーツや、特産品であるひじきをふんだんに使ったしっとり系のパウンドケーキ。どちらも材料にこだわり、たまご・砂糖・小麦粉など、数十種類の材料で試作をくり返してつくり上



島の恵みたっぷりパウンドケーキ。

げたスイーツ。材料の製品の味を引き立たせる素材で自然な味わいが楽しめる。平成二四年九月からは、地域の安全安心・利便性の向上・学習や仕事への活用のため、地域への高速通信導入・利活用についての勉強会を毎月開催。関前諸島の固定通信環境は未だに「ISDN」という低速通信環境のみとなっており、現在、この状況を改善するため地域住民の方とともに活動を続けている。また、携帯電話の受信状況調査なども行っている。

同年一〇月に大三島との新航路就航に合わせて開設した関前諸島のホームページ「きないやせきせん (<http://sekiizenweb.com/>)」毎日更新して関前の地域情報を発信する「茜色のブログ (<http://ameblo.jp/xer/>)」を運営している。

◆ふれあいの拠点「まるせきカフェ」

平成二四年一二月からは、珈琲焙煎器を活用し「せきぜんコーヒーの会きないやカフェ」を毎月開催し、関前諸



古民家を再生した「まるせきカフェ」。

島のイメージに合う関前ブレンドの開発や、サロンの集いの場の提供などを行っている。コーヒーの会では、焙煎・ブレンドコーヒー以外にも、スイーツの試食やカプチーノ、カフェモカなどの新商品開発のお披露目なども行っている。社会福祉協議会と連携し「まるせきの家サロン」を定期的に開催。協力隊がつくったスイーツや飲み物を持って、大下島・小大下島でも出張サロンを行っている。その都度テーマを決めて、昔の写真を持ち寄って当時の地域の姿や昔の遊びを教えていただくなど、住民の方々と非常に楽しんでいふれあいの場が持てている。

平成二五年四月からは定住に向けた活動として、築八〇年で一五年間空き家だった古民家を借りて改修に着手。地域の人々の要望・地域に足りないものを複合的に解決できる拠点づくりを進めた。

外壁の塗装・土壁の撤去と補修・和室撤去・土間打ち・漆喰の左官、そして電気工事士の資格を取得して



地域住民が気軽に立ち寄れる場としてランチなども提供。

電気工事までも自らが行い、今年三月二一日、愛媛県・広島県共催による島の祭典「瀬戸内しまのわ2014」の開幕に合わせて「まるせきカフェ」をオープンさせた。

「まるせきカフェ」では、「しまのわ2014」で来島した方々のおもてなしのほか、地域住民が気軽に立ち寄れる場としての機能と、観光案内やICT相談所の機能とを併せ持ち、住民からの要望が多いパンの販売や、平日のランチ提供なども行っている。

J Aの集荷が終わって行き場のない産品や、集荷対象外の作物の有効活用、自分で育ててきた作物を提供できる場をつくることで、ユーザーと生産者が直接ふれあうことができ、やりがいや生き甲斐にもつながる場にしていきたい。

今年度は、関前中学校と連携し、地域おこし協力隊の仕事を通して、総合学習の時間に子どもたちと体験学習を行っている。昔から地域に住んでいる人の目線、外から移住してきた人の目線、そして子どもたちの目線を体験を通して結びつけ、地域の未来の姿を考えていくことができる学習になることを願っている。

受け入れ側からみた隊員の活動

●島の現状

関前諸島は、岡村島、小大下島、大下島の3つの有人島で構成されている。戦後の一時期まで4,000人を超えていた人口も戦後の高度成長期とともに若者のみならず家族ごと都会へと流出し続け、平成26年4月末現在の人口は508人と激減している。

就学前児童はおらず、小中学生も9名となっており数年先には島から子どもの声が聞こえなくなるのも現実の問題となっている。また、高齢化率は67%と非常に高くなっており、島の将来を危惧する声も聞こえてくる。地域唯一の産業ともいえる農水産業では生計を立てることが難しく、ほかに働く場もないためU・Iターン者も望みにくい。一方でお年寄りも80歳過ぎでも生涯現役と元気で暮らしており地域を支えている原動力でもある。人口減少、少子高齢化などの諸問題を抱えている関前諸島であるが、地域の活力を取り戻そうと地域住民らで「地域活性化推進協議会」を組織し、市の支援を受けて頑張っている。しかし、人口減の歯止めとなるような取り組みはなかなか難しい状況である。

●隊員の活躍

平成24年4月、今治市島嶼部に「地域おこし協力隊」を受け入れることとなり、関前地域には東京都出身の成田晶彦さんと大阪市出身の安井紫乃さんの2名が配属され活動を開始した。

地域おこし協力隊員を導入することとなった当初は、正直あまり期待はしていなかった。3年の任期が終われば去っていき何の形も残らないのは必至であろうと、何にもない“辺境の島”に何を求めて来るのか理解しがたかったのが本音である。

着任後、二人の隊員は将来の定住を見据えた活動を続け、3つの島で形成された地域の特異性も苦にせず、それぞれの島にも足しげく通い、これまで地域で行われてきた地域活動にも積極的に参加し地域住民とのコミュニケーションを深めている。今年3月21日には「瀬戸内しまのわ2014」の開幕に合わせ、地域住民や観光客などの憩いの場と地域の情報発信の場としての性格を併せ持つ拠点施設「まるせきカフェ」をオープンした。

●これからへ向けて

彼らのめざすところは「定住し産業をおこすこと」であり、任期終了を間近に控え、さらなる地域の魅力や課題を的確に分析し、意欲を持って新しい地域づくりに向け取り組みつつある。

二人の進めてきた取り組みに地域住民も共感し、よい刺激にもなっている。今後の地域おこしの原動力となることを期待したい。

(愛媛県今治市関前支所長 中野美喜男)

◆任務達成の実感と定住へ向けて

島に暮らして二年余り、積極的に地域活動を行ってきた結果、自分たちでも地域の中に溶け込んでいることが実感できる。住民の方々とのコミュニケーションも非常にうまくとれており、さまざまな面で応援していただける方々に囲まれて充実した日々を送っている。任期終了後に向けた定住の準備が順調に進んでいて、現時点で起業定住の目処が立っているのので、協力隊の活動としては目標を達成できたとと思う。

今後、農業生産法人を立ち上げ、農業で採れた産品を加

工し、まるせきカフェを通して販売するスタイルを確立し、ネットを通じた拡販などにも取り組んでいく。

地域に働く場が非常に少なく、定住を希望しても難しい現状がある。目標は地域に産業(雇用)をおこすこと。地域に帰りたくても働く場がないので戻って来ることができない方もいるし、Iターンなどで移住者を募るにも収入を得られる場所が不可欠となっている。

産業が育てば雇用以外にも地域の活力が上がり、知名度もアップする相乗効果が得られるため、過疎化と高齢化に歯止めがかけられるような活動につなげていきたい。

■